体育会系少年少女たちへの賛辞

増田 俊也

北海道大学柔道部時代の自伝的小説『七帝柔道記』（角川書店）を上梓して以来、スポーツ教育現場からときどきコメントを求められるようになった。

この小説は、旧七帝大（北大・東北大・東大・名大・京大・阪大・九大）だけに伝わる寝技中心の特異な柔道〈七帝柔道〉に、学業を放擲してのめりこむ青年たちの日々の練習ぶりを、これでもかと描いている。そのリアルさが現場の先生方に驚きをもって迎えられたのだ。国内外を問わずこれまでのスポーツ小説はすべて試合での戦いばかりが中心に描かれていた。そこに体育会出身の私は違和感を感じていたのだ。

中学でも高校でも大学でも、運動部員たちはそのほとんどを長時間のハードなルーティン練習に費やしている。『七帝柔道記』でいえば七帝戦は年に一回、二日間行われるだけで、一年のうち三百六十三日は、毎日毎日苦しみながら練習漬けの日々を送っている。正直言って、試合は一年のうちで最も楽な二日間だった。その二日間で二、三回しか戦わなくていいからだ。日々の練習ではたとえば年に何度も何度もある合宿で朝六時から延々と数時間の乱取り（スパーリング）、午後から多くの練習試合を繰り返し、夜はまたいつ終わるとも知れぬ乱取りを数時間、歯を食いしばってこなしていた。合宿中だけでなく、普段の通常練習でも毎日体重が六キロも七キロも落ちるほどの過酷さだった。

七帝柔道だけではない。どこの地方の中学野球部員でも高校サッカー部員でもみな同じである。私たち大人が冷暖房の効いた部屋で快適に過ごしている今この時間にも、全国数万校の運動部で毎日朝晩数時間に及ぶ体力ぎりぎりの練習が続けられている。

こういった非合理的ともいえる苛烈な学校運動部カルチャーは、実は日本独特のものである。西洋ではもっと合理的な練習が何十年も前に定着し、日本国内でさえこのカルチャーは時に非難されるようになってきた。しかし私は一概にあのような生活をすべて否定することはできないのだ。それは、卒業して大人になり、中年になり、さらに老境にさしかかって足腰がおぼつかなくなった今も、仲間たちとのあの部生活の想い出は色褪せるどころか日々輝きを増し、渇いた心に果実を落とし続けてくれるからである。夕方散歩していると、ときどき近くの中学や高校の泥まみれのユニフォームを着た少年少女たちとすれ違う。彼らは練習で疲れきっているのに、知らない初老の私にも例外なく「こんにちは」と挨拶してくれる。そんなとき私は、彼らに心からの賛辞をこめて笑顔を返すのである。

プロフィール
1965年愛知県生まれ。作家。北海道大学中退。2006年『シャトゥーンヒグマの森』（宝島社）で「このミステリーがすごい！」大賞優秀賞受賞。2012年『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』（新潮社）で大宅壮一ノンフィクション賞と新潮ドキュメント賞をダブル受賞。他著に『七帝柔道記』（角川書店）など多数。

月刊 みんぱく

4月号目次

1 エッセイ　千字文
体育会系少年少女たちへの賛辞
増田 俊也

特集　体育会系

2 体育会という日本文化を考える
瀬戸 邦弘

4 黒帯のムラ社会――白線黒帯にみる男と女の境界線
溝口 紀子

5 師弟を結ぶもの、分かつもの――台湾の空手社会
小林 貴幸

6 共同体を支えるもの
窪田 暁

7 汗は嘘をつかない
萩原 卓也

8 「一石四鳥のスポーツ」の会
樫永 真佐夫

9 自ら判断する個人の集合――山岳部
南 真木人

10 ○○してみました世界のフィールド
「うみうのウッティー」が教えてくれたこと
卯田 宗平

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
ハーンギー
深山 直子

16 文化遺産おもてうら
海を越える「円楼」
河合 洋尚

18 手芸考
余剰からうみだされる造形物
――手芸について考える
上羽 陽子

20 ながなんぢゃ
題名だって悩んで決めるし
吉岡 乾

21 次号予告・編集後記